

タイトル：新一年生にあげる朝顔の種

問題場面：もうすぐ2年生へ進級する3学期末、新一年生をどう迎えようかという話を始めた。「学校探検に連れていきたい」「校歌を教えてあげたい」「つくった映画を見せてあげたい」など様々な意見が出された。その1つに「朝顔の種をあげよう」という意見があった。入学したときに親切にしてくれた2年生に自分たちになる。その思いから立ち上がった活動である。2年生に手伝ってもらいながら種をまき、育てた朝顔から種を取る経験をした子どもたちは、まいた種が全て発芽するわけではないことを知っている。また、朝顔の種は管理が難しく、失くしやすいと感じている子どももいる。新一年生に種を幾つあげればよいのかを自分たちの経験をできるだけ客観的に振り返りながら決めていく。

対象：小学校第1学年・第2学年

目標（何を育むか）：

- ・目標や取るべき行動について合意形成をするために、意見を伝え合う姿勢。
- ・出来事に対する自分の捉えを数にして表し、その意味を伝えたり、仲間が表した数の意味を理解しようとする姿勢。
- ・現実の出来事に関わって数が意味をもつという見方。

指導計画：全5時間

第1時（算数）

- ・新1年生に朝顔の種をあげることが成功するとどうなるのかを話し合い、活動の目標を決める。
- ・あげた種全てを新1年生が発芽させられるわけではないことを経験から明らかにし、あげる個数を決め、そのように決めた理由を意見交換する。

第2時（算数）

- ・発芽しなかった個数やなくした個数など、発芽させられなかった種の数をもとめた資料も参考に、新1年生にあげる種の数を決める。

第3時（生活）

- ・新1年生宛に朝顔の育て方マニュアルやメッセージなどを作成するために、朝顔を育ててきたことを振り返り、まとめる。

第4時（国語）

- ・新1年生宛に朝顔の育て方マニュアルやメッセージなどを作成する。

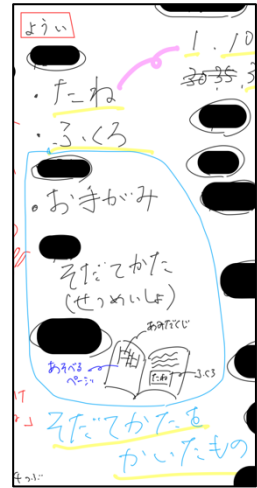
第5時（生活）

- ・新1年生に自分の気持ちや朝顔の育て方などを伝えながら、種を渡す。
- ・朝顔の種をまく手伝いをする。

目標を考えたことで、1年生の立場に寄り添う姿勢が多く示され、渡す朝顔の種を同じにするという意見が支持されることになったと考えられる。

場面 2. 何を用意したらよいか。

朝顔の種を渡すにあたって用意するものを話し合った。種、種を入れる袋、そして育て方を書いたものが意見として出され、それらを用意することに決まった。種を渡す、という取り組みには、子どもたちが新 1 年生に関わって朝顔の育て方を教えるという場面にこだわりをもっていることが垣間見える場面となった。新 1 年生に関わること自体にこだわっている様子として、朝顔の種を渡す活動ではなく、校歌を教えるために学校の校歌(の歌詞)を用意するという意見も出された。新 1 年生と関わりたいという子どもたちの願いが強いことがよく分かる場面となった。同じ数の種を渡す、ということは、場面 1 で既に具体的に語られていたが、用意するものの種類に気が回っていたためか、授業者が「種用意するってんだけど、1 粒用意して袋に入れてっていうことでいいのかな。」と問いかけるまで、種の数について意見はされなかった。

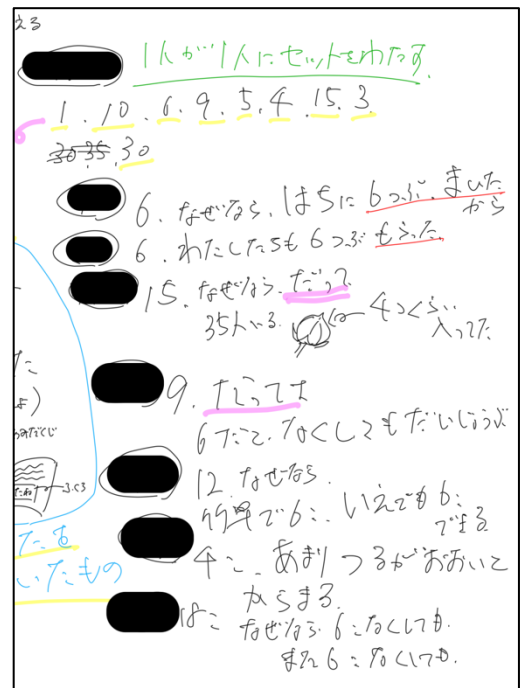


場面 3. 種をいくつ渡したらよいか。

授業者が渡す種の数に話題をふると、それは大切なことだと感じたらしく、それぞれに思っている数を子どもたちが意見した。授業者がその数だと思う理由を聞いた。その理由は大きく4つあった。1つ目は、昨年に蒔いた数だから、もらった数が6粒だったからといった自分がもらった時の経験からの意見であった。2つ目は、あまり蔓が多いと絡まって育てにくい、という育てた経験からの意見。3つ目に、学校で育てる分と自宅で育てる分があるとよいという意見。そして4つ目に、種を失くすことを想定して余分を付け加えておくという意見であった。

授業前に想定していた発芽しない種（発芽率）
については触れられなかった。

種を失くしやすい、という子どもたちの実態も分かる場面となった。



場面 4. 種は失くしやすい。いくつ失くしたか。

種を失くしやすいという感覚を確認した上で、授業者はなくしたことがあるかを聞いてから、何個なくしたかを聞いた。子どもの各々の曖昧な記憶についての調査になるが、それも含めて数に表す場になった。結果をみながら、渡す数をいくつにしたらよいかについて幾つかの意見を聞いて1時間目は終了した。

② 第2時

場面5. 失くした種の数と人数の資料から、予備で渡す種の数について意見を伝え合う。

場面6. 予備で渡す種の数を決める方針について意見交換する。

【板書記録】

3/8
あさがおのおたね? 7つ

6つ3: まく

1つ3: → 3人
2つ3: → 3人
3つ3: → 1人
4つ3: → 0人
5つ3: → 1人
6つ3: → 4人
7つ3: → 1人

なくした

6 + □ = あげる
たねのかず

おたすけたね(まぐ)を
いくつにしたら、いいかな?

6つ
なくした人数がい
ちばんおおい

7つ

さいたてい7つなくした子かいる。
6つのおまぐ

8つ

こしほ、さいたてい7つだけ、もう1つ3:なめは
あるかもしれない。

まくかすみ
おたすけたねおおい
おおい

6

なくした子。
7つおいて、6つ、いそいそ6つ

6・7-8
おうちか
うんたい

1つ3:もたねてない
たねかある

なくす子は0人ではない
すくなければ
一年かきをつける
おまぐきとあるし
すくなきとつかない
(たない)

あまるのは、まだよいけど
たりないのは、せうたいが、
10つ3:はおおいから
その1はん3:の5つ3:
5+5=10 ながら

場面5. 失くした種の数と人数の資料から、予備で渡す種の数について意見を伝え合う。

時く種の数に6粒とした上で、予備を幾つにするかを失くした数と人数の資料をもとに意見を出し合った。人数が最大の6粒、と失くした数として最大の7粒が予備を決める時の理由に挙げられた。

資料をよむと最大値に注目する姿が見られた。

3/8
あさがおのおたね? 7つ

6つ3: まく

1つ3: → 3人
2つ3: → 3人
3つ3: → 1人
4つ3: → 0人
5つ3: → 1人
6つ3: → 4人
7つ3: → 1人

なくした

6 + □ = あげる
たねのかず

おたすけたね(まぐ)を
いくつにしたら、いいかな?

6つ
なくした人数がい
ちばんおおい

7つ

さいたてい7つなくした子かいる。
6つのおまぐ

8つ

こしほ、さいたてい7つだけ、もう1つ3:なめは
あるかもしれない。

まくかすみ
おたすけたねおおい
おおい

6

なくした子。
7つおいて、6つ、いそいそ6つ

6・7
おうちか
うんたい

1つ3:もたねてない
たねかある

なくす子は0人ではない
すくなければ
一年かきをつける
おまぐきとあるし
すくなきとつかない
(たない)

あまるのは、まだよいけど
たりないのは、せうたいが、
10つ3:はおおいから
その1はん3:の5つ3:
5+5=10 ながら

場面 6. 予備で渡す種の数を決める方針について意見交換する。

資料の数値を理由に個数を決める意見としては、最大値に注目した意見しか出されなかった。最大値に注目した意見が出された後は、資料にもとづいた意見ではなく、予備で渡す種の数を決める方針についての意見が続いた。どの程度種をなくしたかは、予備の数を決める一要因でしかないと子どもたちが考えている実態が分かる場面となった。

それぞれにいくつ渡すかを考えて授業は終了した。

③活動修了後

2 年生になり、新一年生に種を渡し、朝顔の種を蒔く活動を手伝った後に 8 名の児童にインタビューを行った。あげる種の個数は、「授業者との授業で考えて 8 粒と決めた」と子どもたちがクラス担任に伝え、蒔く 6 粒と予備の 2 粒で 8 粒とクラスでしていた。

インタビューの内容は

A:本活動への関心を確認するために、1 年生にいくつ渡すことに決まったかを確認する質問

B:渡す数が 8 個に決まったことについて、納得しているかどうか、とその理由の質問

C:授業 2 時間目に扱った、失くした個数と人数を提示して、どう思うかを聞く質問

【インタビュー結果】

	A 関心	B 納得している理由 (8 名全員納得と回答)	C 失くした個数と人数を提示して
1 児	あり	失くしても植えられる 3 個なくした場合はしょうがない	自分だけなら 10 個くらいあげることにする。
2 児	あり	2 個以上失くす人はそんなにいない	そのときも 8 個だけど、7 粒なくした人が 1 人いたから 8 個というのは気持ちが変わった。
3 児	あり	種をこぼしても、ずっと探せば、なくなるのは 1、2 個	7 個なくした、は、育てた後に、できた種をなくした個数だと思う。
4 児	あり	家でも育てられる数が 2 個ある	なんでなくすの、と思う。
5 児	あり	なくしちゃったときの予備は 2 個でいい。	2 個でいい。3 個失くした人には 1 個譲る。
6 児	あり	3 個なくして 5 個残って、5 個なくして 3 個ある。	8 個に決まったことと関係ない。
7 児	あり	2 個なくしても 6 個あって、もう 1 個なくしても 5 個ある	8 個に決まったことと関係ない。
8 児	あり	2 つ失くした時のため	8 個に決まったこととちょっと関係ある。何人が失くしたとかを自分でわかって、何粒にするか決められる。

新 1 年生に渡す種の数 が 8 個に合意形成されたことは 8 名全員が納得していたが、納得していた理由は様々であった。失くした個数と人数の資料の読み取りについては、資料の傾向を掴んでいる様子はなかった。また、個別の数値から読み取れる現実やその対処方法について答える様子があった。